

〔洞房語園異本補遺〕寛永十三年の頃より、町中に風呂屋といふもの發興して、遊女を抱へ置、晝夜の商賣をしたり、是よりして、吉原衰微したる也、吉原を最負する人は、風呂屋女に仇名つけて、猿と云ける也、垢をかくといふ心か、

〔好色一代女五〕小歌傳授女

一夜を銀六匁にて呼子鳥、是傳受女なり、覺束なくて尋ねけるに、風呂屋者を猿といふなるべし、  
〔我衣〕牛王賣ノ比丘尼ハ、略中天和ノ頃ヨリ遊女發行スルニヨリ、カヤウノ族モ賣女トハナリタリ、然レドモ元來僧形ナレバ、衣服ハ木綿ヲ著シタリ、

比丘尼

〔人倫訓蒙圖彙七〕歌比丘尼 もとは清淨の立派にて、熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣をりやくし、齒をみがき、頭をさいにつゝみて、小歌を便に色をうるなり、

〔紫の一本下〕赤坂

赤坂裏傳馬町へ出たるに、下町めつた町からくる比丘尼、風流に出立にて、菅笠のうち略中陶々齋町家へ入て、知る人をよび出して、様子を聞ば、めつた町よりあまた來る比丘尼のうちにも、永玄お姫お松長傳と申候が、爰元で名取にて候、揚屋は仁兵衛安兵衛と申候が、きれいに候、今の小袖かたびらは宿へつき候とぬぎ捨て、明石ちゝみ絹ちゝみ白さらしうこん染めに、紅袖口うらえりかけ黒縹子茶縹子は、廣帶黒羽二重の投頭巾、又は帽子でつゝ、むもあり、小比丘尼どもに酌とらせ、市川流の夜終、もしほ草の大事のふし、ね覺さびしききりくす、ながき思ひをす、がの根の、思ひ亂るゝ計りにて候といふ、

〔塵塚談上〕勸進比丘尼、賣女比丘尼の事略中賣女比丘尼は、芝八官町、神田横大工町にて、美服を著し賣けるよし、是につゞきて下直の比丘尼は、淺草田原町、同三島門前、新大橋河端などにて、家毎に二三人づゝ出居たり、右兩様の比丘尼共、今化文は絶てこれなし、